

100%とちぎ愛

下野新聞創刊140周年

2017年に開園20周年を迎えた那須どうぶつ王国（那須町大島）。「進化せよ」をスローガンに今年3月にオープンした全天候型屋内施設「WETLAND」が好調です。7月14日にはWETLANDに新しいエリアが加わり、カワウソやビーバーを見ることが出来ます。一方、下野新聞も「100%とちぎ愛」を創刊140周年記念コンセプトにこれまで以上に郷土愛たっぷり紙面をお届けしていきます。そこで那須どうぶつ王国の佐藤哲也社長に未来に向けた戦略、生物多様性に関する活動などのほか、「とちぎ愛」について語っていただきました。（企画・制作 下野新聞社営業局）

下野新聞創刊140周年企画特集

さとう てつや 佐藤 哲也 社長

那須どうぶつ王国

2018年春にオープンした新施設「WETLAND」では、怪鳥ハシビロコウが迎えにくれます



バードパフォーマンスショーロードでは、ワシ、タカ、ミミズクなどの猛禽類が大自然を舞台にさまざまなパフォーマンスを行います

ジャガーやハシビロコウを展示するWETLANDではアメリカバクのエサやり体験やジャガーのエサやりをご覧頂けます



カヒバラの湯ではエサやり体験やカヒバラの水中遊泳、冬には温泉に漬かる様子が観察できます



新エリア あすオープン

■那須どうぶつ王国の将来のビジョンをお聞かせください。20周年のスローガンは「進化せよ」でしたが、21年目は「進化は続く」です。7月14日には「WETLAND」を拡大します。拡大したエリアでは、シアカワウソとアメリカカヒバリが泳ぐ姿をガラス越しに観察

できます。ユーラシアカワウソは絶滅種のニホンカワウソの亜種です。ユーラシアカワウソを見てもいい、昔日本にもこのカワウソと同じ生き物がいたということを感じてほしいですね。

■野生動物や環境の保護、保全、普及啓発にも力を入れています。昨年6月から、国の特別天然記念物であり国内希少野生動物種ライチョウの受卵卵を受け入れ、ふ化と飼育を開始したとのことですね。

野生動物の保全、保護は動物園の大きな役割の一つです。そのことを広くお客さまに知っていただくことが重要です。現在、どうぶつ王国ではツシマヤマネコが餌場としている水田で収穫された「ツシマヤマネコ米」を屋内レストランで使用しています。

ライチョウのふ化、飼育はノアの方舟のような意味合いもあります。トキやコウノトリのように数が減ってからは遅いのです。希少動物は人類共通の財産であり、その保全は人類の責務でもあります。

1957年、東京都生まれ。83年から姫路セントラルパーク動物飼育部門の総責任者として勤務。99年に独立し、アニマルエスコートサービス(AES)を設立し、社長に就任。2006年にAESが那須どうぶつ王国の経営権を引き継いで運営、同年から園長に就任。14年には神戸にある施設の運営権を取得し、名称を「神戸どうぶつ王国」としてリニューアルオープン。同年から園長に就任した現在、全国8カ所の常設施設を運営する。

佐藤社長略歴

■開園20周年を記念して新設した「WETLAND」が話題になっています。見どころをお聞かせください。おかげさまで平日、土日問わず多くのお客さまに来園いただいています。WETLANDは亜熱帯の湿地を再現した回廊型

の屋内新施設です。どうぶつ王国初の猛獣となるジャガーや「動かない鳥」として人気がある絶滅危惧種「ハシビロコウ」がいます。動物と人間が共存できる魅力ある施設です。お客さまが施設に入った瞬間、歓声が沸き起こるなど、驚きを感じ

ていただけていると思います。■フリーライトのバードショー「BROAD」も人気ですね。「BROAD」は那須の大自然に広がる王国ファームスカイスタジアムを新設し、フルリニユールしました。このタイナ

100%動物愛を